



# 柏葉

第43号

2024年(令和6年)12月15日

発行 神奈川県立川崎高等学校  
同窓会柏葉会

柏葉



## ◆ご挨拶

柏葉会会長 <sup>しろう</sup>高木嗣朗 (40回生 1971年卒)

日頃より、柏葉会の活動にご支援、ご協力をいただきありがとうございます。

本年度も5月総会から始まり、11月の柏葉交流会まで予定していた全ての行事を行うことが出来ました。総会後の記念講演と演奏会も好評で、さらに多くの皆さんが参加していただければと実感しています。また、他の行事も含め、もう少し工夫や改善をして、多くの方が参加して良かったと思えるよう進化していければと思っております。

今年は、本校がフレキシブルスクールへ移行してから20年の節目にあたるとともに、この地に旧制川崎中学が開校して100年へあと3年に迫る年であり、記念事業へ向けての実行委員会が始動致しました。また、**来年は、青春かながわ校歌祭の実行委員長校**として運営することとなりました。たいへん忙しい一年になるのではと予想されます。

これからも、同窓会活動に目を向けていただき、今までにも増して皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。



▶「青春かながわ校歌祭の大会旗を受け取る高木会長 (9月21日平塚文化芸術ホールにて)」

## ◆「校歌祭」で県立川崎高校の歴史をアピール

渡辺圭子 (45回生 1976年卒)

校歌祭とは、神奈川県内の高等学校の同窓会などが、年に一度、校歌を披露する催しです。我が柏葉会は、現役の吹奏楽部・放送部の生徒たち、そして顧問の先生方と共に、第1回から毎年参加しています。

私にピアノ伴奏のピンチヒッターの依頼が来たのは、新しい川崎高校が創立10周年を迎える年でした。10周年を記念し、統廃合によって校名が消えた川崎南高

▼「校歌祭」(平塚文化芸術ホール 9月21日)に参加した柏葉会会員と川崎高校の生徒たち



校の校歌も歌うことになり、南高で13年間教員を務め、何より南高を愛していた私は、迷うことなく引き受けました。かつて南高は全校生徒約1,600人を擁するマンモス校で、登下校の際には茶色の制服を着た生徒たちが自転車で市電通りを埋め尽くす光景がありました。生徒たちは元気で明るく、学校は活気にあふれていました。

南高の校歌は、宗左近先生が生徒たちと面談をして作詞したと聞いています。「青い宇宙を」という題名が付けられており、生徒の心に響く内容です。作曲はあの有名な三善晃先生によるもので、校歌としては非常に難易度が高く、歌うのが一苦勞でした。参加メンバーは音源を持ち帰って自主練習をし、何度も確認を重ねるなど、非常に努力してくれました。柏葉会の底力に驚かされ、また、二度と歌われないと思っていた南高校歌を立派に歌っていただけたことに感謝し、心から感動しました。

当初の伴奏者が復帰し、私は1年限りの伴奏者としての役割を終え、翌年からは指揮者を務めることになりました。あれから10年、毎年校歌祭の季節が来ると、馴染みのメンバーとの再会や新しいメンバーとの出会いを楽しみ、練習を通して楽しい時間を過ごしています。

新しい川崎高校の校歌は、旧川高の卒業生で作家の島田雅彦さんが作詞し、作曲は第一線で活躍する池辺晋一郎先生によるものです。題名は「世界のどこかで誰かが歌う」で、本格的な合唱曲として大変素晴らしい作品です。この新校歌のお披露目のために結成された「コールかんらん」は、専門的な訓練を重ね、現在

では市民合唱団として活躍しています。毎年、校歌祭での演奏において大きな力となっています。

卓越したピアノ伴奏者が合唱を支え、高校生たちの若々しい歌声が加わることも、魅力を高める重要な要素です。川崎中学時代の校歌、旧川崎高校の校歌を含めた全4曲を、10代から80代までの幅広い世代と一緒に歌うことは、とても意義深いと感じています。私は、毎回この校歌祭を通じて県立川崎高校の歴史を十分にアピールできていると自負しています。今後も、新しいメンバーや南校出身者の参加を心から期待しています。

## ◆「青春校歌祭」って何？ そして参加へ！

渡邊 和也（42回生 1973年3月卒）

今年の「青春校歌祭」は令和6年9月21日土曜日、1200人収容の「ひらしん平塚文化芸術大ホール」で開催された。柏葉会の参加者は45名、出場同窓会中最多の16回。私の参加は、2回目だ。

昨年コロナウィルス感染症が5類指定になり、2年時の担任だった先生の偲ぶ会をやらなかつたかとの声かけで何人かが集まり企画をすることになった。その折り柏葉会常任幹事から青春校歌祭に参加してもらえないかと声をかけてもらい、練習に参加した。学校の統廃合、新校への移行で校歌も4種。旧姓中学校校歌、慣れ親しんだ「光満つ」で始まる校歌、統合で廃校になった川崎南高等学校校歌、新校校歌と4種類の練習を2回ですることを知り少々びっくり。桜木町の青少年センターホールでの本番もやっと終わり、「これで最後にしよう」と思って会場を後にした。

4月から「古希」を迎える年齢になった同期で「古希を祝う会」を3月23日に開催し130名ほどの参加で楽しい時を過ごした。会の中で幹事から「100周年が間近であること」「2025年青春校歌祭実行委員長長校であること」の連絡があった。

決して積極的な参加ではないけれど校歌祭の練習参加や本番参加で古希の年齢なのに新たな友情出会いもできている。

「青春校歌祭」。来年は、本校同窓会柏葉会が実行委員長校。大トリでの出演。20回の記念大会。大和市での開催。自分では、今年の一流れが終わるとともに参加を決めていた。

## ◆2024 輝葉祭報告

副会長 平井昭信（45回生 1976年卒）

本年の輝葉祭（文化祭）は、9月13日（金）校内関係者のみ、14日（土）一般公開で実施されました。

柏葉会では、両日『写真パネル展示』『卒業アルバム展示』、14日（土）AMに視聴覚ホールにて『校歌を歌おう』、14日（土）PMには『homecoming2024』と、4本立ての企画で臨みました。写真パネル展示は、創立80周年、90周年時に、東海道かわさき交流館で展示された写真パネルをそのまま受け継いで、その一部を展示しました。

卒業アルバムの展示は、記念室キャビネットに保管されている昭和一桁時代からのアルバムの中から、今年は、最近20年分を展示、来訪者に自由にご覧にな

っていただきました。

来訪者からの「おばあちゃんの高校時代の写真を見たい」、そんなリクエストにもお答えしました。

初めて顔を合わせる卒業生と展示写真・卒業アルバムを前に話がはずみ、「私も川高仲間に連絡を取ってみたいくなった。」そんな気持ちにさせてくれる二日間でした。

今年はお越しになれなかった卒業生の皆さん、来年は是非お越しください。



▲「校歌を歌おう」の参加者

## ◆Homecoming 2024 を終えて

県立川崎高校元職員

赤川交平（42回生 1973年卒）

今年のHomecoming2024は、例年通り、輝葉祭開催中の9月14日（土）に行われました。



昨今「ホームカミングデー」は、卒業生が集まる行事として大学で一般的に行われているようです。しかし、高校でこのような行事を実施しているのは、少ないと思います。柏葉会では、川津副会長が始めて、現在は、私とその仕事を引き継いでいます。2年前に川崎高校に着任して3年生のクラス担任となり、昨年は19期生と懇談する機会がありました。今年は、20期生の井上先生のクラス副担任として、3月に卒業生を再び送り出し、再会できる機会をいただき、色々な話をする事ができました。また、竹下先生、西本先生、松本先生から、近況報告や卒業生への激励の言葉をいただきました。卒業生同士の交流や輝葉祭を楽しんでいる中で、この行事が毎年開催できることに感謝申し上げます。その中で、各クラスのクラス会開催への苦労話や進路相談などの話も出ました。クラス会を開催したいのだが、なかなか集まらないとか、まとまらないという状況もあるようです。進路先未定の卒業生を何とかしたいという元担任の切実な話も出ました。そういう話を直接聞いたのも成果の一つでした。

Homecomingは、その年の卒業生に限定して招待状を送っていますが、もう少し幅を広げて招待してもいいのかなと思います。柏葉会の招待状を受け取って、今年は「行ってみよう！」という卒業生が増えることを期待しています。来年は、「かながわ青春校歌祭」の実行委員長校となり、参加校の方々の案内や誘導に若手の卒業生の協力が是非とも必要です。卒業生が、同期の仲間、そして、先輩方と柏葉会の行事を通して、県立川崎高校で生まれた絆を、末永く大切に育てていられることを祈念しています。

## ◆ごあいさつ

県立川崎高等学校校長 とのさき 外崎 学



柏葉会会誌の発刊にあたりごあいさつさせていただきます。

本年4月、7年ぶりに川崎高校に着任し半年以上が過ぎました。コロナ禍であったことがうそのように通常の教育活動が行われています。

体育祭は非公開でしたがPTA役員でお手伝いいただいた方々からはたくさんのお褒めの言葉をいただきました。

また、本校文化祭である輝葉祭（旧川崎高校の柏葉祭の葉と川崎南高校の輝南祭の輝を合わせて再編統合後名づけられました）では、生徒たちは独創的な装飾や衣装で来校された方々を迎え、これも大変好評でした。

生徒や職員はアンケートを取り反省をまとめ、来年度はさらにレベルアップした体育祭や輝葉祭にしていきたいと意気込んでいますので、私としては大いに期待しているところです。このように学校行事を生徒主体で作り上げていく形は旧川崎高校時代もそうであったかと思えます。

さて、私が赴任後気をつけてきたのは、生徒たちが単位制Aタイプ校の仕組みを生かして進路実現を図ることです。すでにご存じの方もおいでかと思いますが、単位制Aタイプ校は生徒は必修科目を落とさないようにして、数ある選択科目の中から自分の興味や関心のある科目、進路のために必要な科目を選択して卒業単位数を超えるように「自分の時間割」を作ります。これが、ホームページのあいさつの中でふれた、「令和の日本型学校教育」の中の個別最適な学びを先取りしていることにつながります。この仕組みを活用して、大学進学希望者の中に少しでも高みを目指し挑戦し成し遂げていく生徒が出てくることを願っております。

3年後には川崎中学校が渡田の地に誕生して100年を迎えます。この年の事業に関しましてはPTA、柏葉会、学校が連携して記念となるものを作り上げていきたいと考えており、すでに動き始めております。

今後も川崎高校を見守り、ご協力くださいますようお願い申し上げます。ごあいさつとさせていただきます。

## ■100周年に向けて

柏葉会副会長 加藤孝夫（41回生 1972年卒）

川崎中学校が1927年にできて、100年目まであと3年になった。「渡田の地に開校し地域に支えられた100年を感謝」（仮）するとの考え方の元、記念の動きが進んでいくようである。9月14日、10月12日の二回に渡って実行委員会準備会議が開かれた。実行委員会の組織ができあがるといよいよ本格的に動き出すことになる。在校生にとっても地域の方にとっても川高の100周年が、記録と記憶に残るものになることを祈念する次第である。今後の様々な動きに対して、柏葉会員のみなさまと共に学校への支援を行い、100周年記念事業がそれで終息するのではなく、後の100年まで持続するようなものにしたいとの思いを強くしている。

## ■第16回柏葉会交流会が開催されました

令和6年11月17日（日）に川崎駅近くの「煌蘭」で第16回柏葉交流会が行なわれました。参加人数は同窓生、近隣町内会長、学校関係者、PTA役員の皆様を合わせて総勢27名でした。



冒頭に柏葉会高木会長から「来年は川崎高校が『青春ながわ校歌祭』の実行委員長校となることが予定されており、また、2027年は川崎高校の創立100周年の記念の年に当たるため、関係各所の皆様のさらなるご協力をお願いしたい。」とのご挨拶がありました。また、外崎学川崎高校校長からは、川崎高校の近況報告や現役生の活躍している様子をお話いただき、皆様に今後も川崎高校を見守ってほしいとご挨拶がありました。

第32回生であり、京町1、2丁目町会長の大蔵明男さんの音頭で乾杯を行い、歓談の際には各テーブルで旧交を温めることができました。

歓談の後、加藤副会長の進行により、様々な賞品を巡ってビンゴ大会で大いに盛り上がり、続いて、数人の同窓生からの近況報告がありました。

懐かしい同窓生との楽しい会話で2時間余りの時間はあっという間に過ぎ、最後は川崎高校の校歌（新旧）を歌って交流会を終了しました。

〔第47回生（1978年卒） 立川富士子〕

## ■柏葉会 第91回定期総会

令和6年5月26日（日）、川崎高校視聴覚ホールにて開催されました。高木会長、外崎校長の挨拶に続き、令和6年度行事計画、予算等が審議・承認されました。記念講演は井上利秋氏（元NHK釧路放送局長、42回生・1973年卒）、川崎ウィングスによる「お楽しみ演奏会」と続き、無事終了しました。

## ◆「私とエスペラント

—多様性を認めあう世界を目指して—

北川(矢島)郁子

(41 回生 1972 年卒)



▲一般財団法人  
日本エスペラント協会  
理事長：  
北川郁子さん

エスペラントって何？—  
ことばの違いや民族間の対  
立を乗り越えて世界中の  
人々が自由・平等に、そし  
て平和にコミュニケーション  
できたら！—1887 年  
にポーランドのザメンホフ  
という眼科医によって創案  
され発表された「国際共通  
語」がエスペラントです。

そんな理想的な言葉の存  
在を知ったのは高校生の時  
で、語学や文学が好きで、  
自分の目で、足で世界を見  
て歩きたいと夢見ていた私  
は大学生になったらきっと

習得したいと考えていました。残念ながら、当時は語  
学学習の手段は今のようオンラインといったものは  
なく、大学時代はエスペラントを学ぶ機会を得るこ  
とができず、休学中に滞在したカリフォルニア・バーク  
レー（ヒッピーの発祥地でもあり、人種、国籍、性、  
出自に関わらず人々が自由に集う学生の街）での 2 ヶ  
月の経験があまりに素晴らしく、私は英語媒介の国際  
交流の世界に数年間どっぷり浸かっていました。

私がエスペラントを始めたのは、神奈川県<sup>の</sup>外国語  
（英語）教師になってから 4 年目の 1982 年のこと  
になります。新設校 3 年目の高校に赴任し、ここで私は  
英語一辺倒の外国語教育が生徒たちの世界観や価値観  
に好ましくない影響を及ぼしているのではないかと感  
じるようになりました。折しも、冬休みに一人旅をし  
たフランスやイタリアの街中では英語など全く通じず、  
自分の中の「英語過信」に猛省を促された時期でもあ  
りました。常にネイティブが優位に立つ「英語依存」  
を脱したいと思った時「エスペラント語でブルガリア  
に親子留学」を記録した本に出会い、独習書『エスペ  
ラント四週間』を読破しました。その直後の韓国での  
日韓青年エスペラント・セミナー参加を皮切りに世界  
各地での国際大会や合宿等に参加し、エスペラントの  
生きた言語としての有用性を実感し、高校ではエスペ  
ラント部や、正規の授業で教えたり、地域では川崎エ  
スペラント会という市民サークルを仲間たちと立ち上  
げ 40 年近くになろうとしています。コロナ禍の  
2020 年、第二世紀を迎えた一般財団法人日本エスペ  
ラント協会の理事長という思いがけない大役に就くこ  
ともになりました。

対話を拒む武力と憎しみに煽られる世界の中で、微  
力ではあってもアジアや世界の人々と友好を深め、多  
様性を認め合う寛容な社会を実現するために、橋渡し  
言語としてのエスペラントの価値を少しでも多くの  
方々に伝えていきたいと願っています。

〔\*「エスペラント語でブルガリアに留学」を記録  
した本：  
『ドナウの彼方で』（藤本ますみ著・中公文庫）〕

## ■校長室の俳句パネルの向こう側

—俳句グループ「笛の会」の皆さんを訪ねて—

輝葉祭当日、同窓会副会長・加藤孝夫氏とともに、  
校長室を訪れる機会があった。興味深い俳句パネルと  
解説文が目飛び込んだ。

### みらいけん 未来圏の風来る母校 銀河澄む



くぐりに訪れた母校は斬新なデザインの学び舎、「風と光」  
のあふれる校舎。授業の中味もまた先進的である事が想像され  
た。このような環境で学べる後輩へ送るエールの句。君達には  
未来圏からの風が吹いているよ。（自句自解）

俳句作者 小田嶋野笛（「未黒野」俳句会同人）

刻字作者 内田梢雷（毎日書道会会員、書道家）

（いずれも昭和 35 年 3 月卒業生）

俳句作者の小田嶋信枝さん（俳号は野笛）へ手紙を  
差し上げたところ、毎月、横浜市緑区長津田で句会を  
開催されているとのことで、10月28日、会場にお邪魔  
することができた。私は、まったく存じ上げなかつたが、  
小田嶋さんは「同窓会・柏葉会の総会で、記念  
講演を行ったことがある」、と言われた。調べてみる  
と、2010 年(平成 22 年)の総会で、「俳句のススメ」  
と題して記念講演をされていたことが判明する。  
これは大変に失礼いたしました。おそらく、俳句パネ  
ルの〈自句自解〉に言う「くぐりに訪れた母校…」との  
説明は、講演の時のことをおっしゃったのだろう。



▲俳句会「笛の会」の皆さん (29 回生・S35 年卒)

さて、当日参加されていたのは、全員が県立川崎高  
校の 29 回生 (S35 年卒) の皆さんだった。現在、柏  
葉会の相談役・鈴木孝雄さん（元柏葉会会長）もメン  
バーの一員だった。20 年余前、60 歳ごろに開催され  
た同期会で、ハイキング・ゴルフ・釣り・俳句など、  
趣味の会を作ることが提案されたそう。

句会「笛の会」は、それ以来続いているという。平  
塚や新宿、さらには遠くは、埼玉県狭山市から足を運  
ぶ方もいた。この日の参加者は 14 人。ひとり 3 句を  
創作して持ち寄り、みなさんで講評を楽しんでいらっ  
しゃった。各々が昼食の弁当を持参して、夕方 5 時ま  
で句会は続く。同窓生ならではの話も弾むのだろう。  
なんだかゆったりした時間が流れていて、大変に心地  
よかった。（取材：秋山誠 41 回生 1972 年卒）

### 【編集後記】

1 面上段の横書き題字部分の図案や文字を整理し  
て、「柏葉」の文字も大きくしたら、紙面がすっきり  
見えてきた。加藤副会長の発案である。紙面の充実  
に向けて、これからも会員諸子の話題・情報提供をお願  
いしたい。